二　左の文章を読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

私は、社会的に共有されるという意味での文章を成熟度の高い文章（あるいは文体）とよぶことにしている。そういう文章は、［　　］のように、さまざまな主題の表現のための多用性をもつものと思っている。

この点、漱石の存在はあざやかすぎるくらいである。かれの文章は、その時代ではケウ(イ)なほどに多用性に富み、人間に関するすべての事象をその文章で表現することができた。このことは、セザンヌという絵画史上の存在にも適用できる。セザンヌはただ絵を描いたのではなく、絵画を幾何学的に分析して造形理論を展開し、かれの理論を身につけさえすればたれもが絵画を構成することができるという一種の普遍性に達した。これに感動した同時代の後進であるゴーギャン(注1)にいたっては、さあ絵を描こう、というとき、〝さあ、セザンヌをやろう〟と言ったほどだったという。

漱石の門下やそのシシュク(ロ)者にとって、言葉にこそ出さなかったが、文章については〝漱石をやろう〟という気分だったにちがいない。この意味で、漱石の文章は共有化され、やがて漱石自身とはかかわりなく共有化されてゆく。文章史上、〝漱石〟におけるような性能をもち、似たような役割をはたしたものとして子規の散文があげられる。むろん鷗外も加えられるべきだが、露伴はすこしちがうかもしれない。

露伴の文学はもっと再認識されてもいいと私は思っているが、ただ、その文章にかぎっていえば漱石や子規とはちがい、文学の重要な要素の一つである日常の些事(a)［　　］やグチ(ハ)をのべる性能をもたなかった。むろん、文学としてはむしろそこに露伴の特徴があるといっていいが、しかし、こんにち、社会的に共有化されてしまった文章日本語の場からふりかえってみると、露伴の文章は成熟への過程に参加する度合がすくなかったような気がする。そのことがこんにち、露伴の日本語を身近でない存在にしているのではないか。

明治後の文章の歴史を考える上で、丘浅次郎（一八六八～一九四四）は貴重な存在(1)といっていい。かれは漱石や子規とほぼ同年代に大学予備門(注2)に在学し、作文と歴史の二科目ができなくて連年落第したため、規定上、退学さ

せられた。無資格であるため、大学（理学部）も選科をえらばざるをえなかった。

このため、かれは明治の文章教師たちの〝規範〟[2]を憎悪していた。丘は、動物の形態・分類学者としてすぐれた業績をあげたが、それ以上に進化論の紹介者として、また進化論的な文明批評家として、大正期における印象的な文章活動をした。

丘の文章は、地理の教科書のように事物を明晰にとり出し、叙述も平易である。たとえば『善と悪』（大正十四年）という高度な倫理学的主題について生物学の立場から展開した文章などは、述べかたが犀利（さい）で、論旨が明快なだけでなく、一種ふしぎな憂憤がこめられている。このため読む者は論理のすじをたどるだけでなく、文中の微妙な感情のなかにも快く入ってゆける。

丘のおもしろさは、大正期にその文章がいくつかの中等学校教科書に名文の例として掲載されていることである。明治十年代の後半に、作文で落第した人物が、大正末年には逆に文章の一規範にされているというところに、歴史を感じさせる。

丘に『落第と退校』（大正十五年）という文章がある。一部、抜粋する。

私が二年と二学期、予備門にいた間にすこぶる点の悪かった科目は、歴史のほかに漢学と作文とがあった。（中略）私の考えによれば、作文とは自分の言いたいと思うことを、読む人によくわからせるような文章を作る術であるが、私が予備門にいたころ（明治十五～十七年）の作文はそのようなものではなかった。むしろなるべく多数の人にわからぬような文章を作る術であった。例えば、金烏（きんう）が西の山に入ったとか、玉兎（ぎょくと）が東の海に出たとかというように、謎か、判じ物のような言葉を使うて文をつづり、一番わからぬ文章を書いた者が一番上等の点をもろうたように覚えている。

丘がこぼすのもむりはなく、旧文章は幕府の瓦解とともにほろんだとはいえ、学校教育の場にひそんで生きつづ

けていたのである。作文教師の多くは旧幕時代を経た漢学者だったが、かれらは文章というものは中国の典籍か故事などを踏まえて修辞するものだと信じていたため、丘のような文章は雑言としかおもえなかったのにちがいない。

近代社会は、商品経済の密度の高さと比例している。商品経済の基礎は、物の質と量を明晰にすることを基礎としているが、文章もまたその(b)埒外ではない。

福沢諭吉の文章もまた、漱石以前において、新しい文章日本語の成熟のための影響力をもった存在だった。かれは、自分の文章は猿にさえ読めるように書くといった人物であり、丘が落第した時期、『学問のすゝめ』や『文明論の概略』は(3)新・古典に近かった。それでも官学の牙城である大学予備門の作文教師の文章観を変えさせるまでには至っていなかったものとみえる。

以下、福沢に即してのべる。かれでさえ、自分の文章から脱皮したのは、六十すぎに刊行した『福翁自伝』(明治三十一年)においてである。明晰さにユーモアが加わり、さらには精神のいきいきした働きが文章の随処に光っている。定評どおり自伝文学の白眉といっていいが、ただ重要なのはこれが文章意識をもって書かれた文章ではなく、口述による速記であるということである。幕府瓦解までの自分とその周囲のひとびとの心の動き、進退についての人間くさいおかしさは、新時代らしい文章の書き手だった福沢でさえ、自分が手造りした文章ではそれらを表現しにくく、口述にたよった。

福沢の時代のひとたちは、事柄を長しゃべりするとき(たとえば講釈師のように)つい七五調になってしまう伝統があったが、『福翁自伝』にもその気配がにおう。このため内容の重さにくらべて、文体がやや(c)軽忽になっている。

しかし『福翁自伝』によって知的軽忽さを楽しんだあと、すぐ漱石の『坊ちゃん』を読むと、響きとして同じ独奏を聴いている感じがしないでもない。偶然なのか、影響があったのか。私は論証なしに、あったと思いたい。

(司馬遼太郎『この国のかたち　六』による)

（注）1　ゴーギャン――フランスの画家ポール・ゴーギャン（一八四八～一九〇三）のこと。
2　大学予備門――明治初期における大学（東京大学）進学準備のための課程。

問

(A)　――線部(イ)～(ハ)を漢字に改めよ。（ただし、楷書で記すこと）

(B)　▌線部(a)～(c)の読みを平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C)　空欄［　　］にはどのような言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1　多機能計算機　2　高性能電子楽器　3　万能研磨機　4　多目的工作機械　5　高感度撮影機

(D)　――線部(1)について。「貴重な存在」であるのはどのような理由によるのか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1　大学予備門を退学させられたが、後に動物学者として成功したから。
2　すぐれた動物の形態・分類学者であったとともに、進化論に関連して印象的な文章活動をしたから。
3　書かれた文章は、論理が明快なだけではなく感情面の表現も分かりやすいものであったから。
4　学校時代に作文で落第しながら、後にその分かりやすい文体が名文と評価されるようになったから。
5　多数の人に分からぬような文章が評価された時代についての興味深いエピソードを後世に残したから。

(E) ――線部(2)について。ここでいう「〃規範〃」とは具体的にどういうことか。本文中からこれを示す一続きの部分を抜き出し、二十字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(F) ――線部(3)について。「新・古典」の説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 書かれて間もないが伝統的な事柄を扱った書物
2 新しい内容を古典的な文体でつづった書物
3 出て間もないが、永く読み継がれるべきとの評価を得た書物
4 新しい事象を扱って評判となった書物
5 出版されてすぐに内容が古くなってしまった書物

(G) 左記各項のうち、本文の趣旨と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 福沢の『福翁自伝』と漱石の『坊ちゃん』は、読むと共通の響きがあり、文体面で前者は後者に影響を与えたことが分かる。

ロ 丘が文章家として評価されるようになったのは、予備門で落第し大学は選科に行かざるを得なかったことがバネとなっている。

ハ 福沢の文章は一部口述に頼ったが、福沢後に登場した漱石は、筆記によって多用性に富む文体を編み出した。

ニ 社会的に共有される文章は、漱石の文章が示すように広く様々な事象の表現をカバーするもので、取るに足らないような日常の出来事や言動も描写できる。

ホ 〃セザンヌをやろう〃、〃漱石をやろう〃という表現が可能なのは、セザンヌの絵と漱石の文章が共通して高い普遍性をもつゆえである。

三　左の文章は『源氏物語』の一節である。宇治の姫君の長女である大君が亡くなった後、次女の中君（匂宮の妻）と、大君を慕っていた薫大将はその面影を忘れられない。中君の暮らす都の邸に、異母姉妹の三女である浮舟が母親とともに訪れ、しばらく滞在することになる。ある日、匂宮が参内した留守に、薫が内裏からの帰りに立ち寄る場面である。これを読んで後の設問に答えよ。（**解答**はすべて**解答用紙**に書くこと）

容貌(注1)も心ざまも、え憎むまじうらうたげなり。もの恥ぢもおどろおどろしからず、様よう児めいたるものから(1)かどなからず、近くさぶらふ人々にも、(2)いとよく隠れてゐたまへり。ものなど言ひたるも、昔の人(イ)の御さまにあ(3)やしきまでおぼえたてまつりてぞあるや、かの人形(注2)求めたまふ人(ロ)に見せたてまつらばやと、うち思ひ出(注3)でたまふをりしも、(a)「大将殿参りたまふ」と人(ハ)聞こゆれば、例の、御几帳(注4)ひきつくろひて心づかひす。この客人の母君、「いで見たてまつらん。ほのかに見たてまつりける人(ニ)のいみじきものに聞こゆめれど、宮の御(注5)(注6)ありさまにはえ並びたまはじ」と言へば、御前にさぶらふ人々、「いさや、えこそ聞こえ定め［　　］」と聞こえあへり。（浮舟の母君）「いかばかりならん人(ホ)か、宮をば消ちたてまつらむ」など言ふほどに、今ぞ車より下りたまふなると聞くほど、かしがましきまで追ひののしりて、とみにも見えたまはず(甲)。待たれたるほどに、歩み入りたまふさまを見れば、(b)げに、あなめでた、をかしげとも見えずながらぞ、なまめかしうきよげなるや。すずろに、見え苦しう恥づかしくて、額髪などもひきつくろはれて、心恥づかしげに用意多く際もなきさまぞしたまへる。内裏より参りたまへるなるべし、御前どもの気配あまたして、（薫）「昨夜、后の宮のなやみたまふよしうけたまはりて参りたりしかば、宮たちのさぶらひたまはざりしかば、いとほしく見たてまつりて(乙)、宮の御代はりに今までさぶらひはべりつる。今朝もいと懈怠(注8)して参らせたまへるを、あいなう御過ち(注9)に推しはかりきこえさせてなむ」と聞こえたまへば(丙)、（中君）「げにおろかならず(7)、思ひやり深き御用意になん」とばかり答へきこえたまふ。

（注）
1　容貌――浮舟の容姿を指す。
2　かの人形――大君の身代わりのこと。
3　うち思ひ出でたまふ――中君が大君のことを思い出す様子を言う。
4　この客人の母君――浮舟の母君。
5　見たてまつらん――薫大将を見申しあげよう、の意。
6　宮――匂宮。
7　后の宮――匂宮の母、明石中宮。
8　懈怠――内裏に遅参したことを指す。
9　御過ち――匂宮を遅参させてしまった、中君の過失を指す。

## 問

(A)　――線部(1)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　利発そうな様子　　2　柔和な様子　　3　しおらしい様子
4　恥じらいのない様子　　5　もの怖じしない様子

(B)　――線部(2)は、浮舟のどのような人柄を表しているか。最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　ひっこみ思案な人柄　　2　幼い人柄　　3　お転婆（てんば）な人柄
4　奥ゆかしい人柄　　5　気弱な人柄

(C)　――線部(3)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　ふしぎなほどかけ離れていることよ　　2　ふしぎなほどよく似ていることよ
3　あきれるほど勝っていることよ　　4　あきれるほど及ばないことよ
5　あきれるほど気おくれすることよ

(D)　――線部(4)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。
1　このうえなく素晴らしい様子　　2　非常に落ち着いた様子　　3　高い身分にふさわしい様子
4　とても贅沢な様子　　5　意外に地味な様子

(E)　――線部(5)の意味を五字以内で記せ。

(F)　――線部(6)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。
1　匂宮が后の宮のお見舞いをしていたこと　　2　匂宮が薫の邸を訪れていたこと
3　匂宮が自邸を留守にしていたこと　　4　薫が后の宮のお見舞いをしていたこと
5　薫が匂宮の邸を訪れていたこと

(G)　――線部(7)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。
1　賢明に　　2　人並みに　　3　疎遠に　　4　格別に　　5　親しげに

(H)　‖線部(a)と同一人物を指すものを、〰〰線部(イ)～(ホ)の「人」の中から一つ選び、記号で答えよ。

(I)　‖線部(b)は誰の動作・行為か。最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。
1　大君　　2　中君　　3　浮舟　　4　浮舟の母君　　5　薫　　6　匂宮　　7　后の宮

(J)　▌線部(甲)～(丙)はそれぞれ誰に対する敬意か。左記各項の中から最も適当なものを一つずつ選び、番号で答えよ。
1　大君　　2　中君　　3　浮舟　　4　浮舟の母君　　5　薫　　6　匂宮　　7　后の宮

(K)　空欄 □ にはどんな言葉を補ったらよいか。最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。
1　ざり　　2　ざる　　3　ず　　4　ぬ　　5　ね